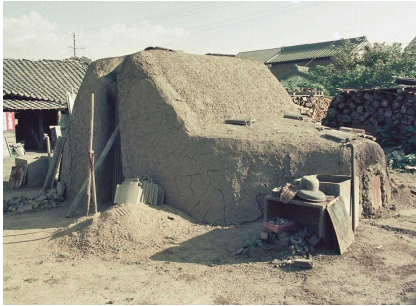


三州いぶし瓦を焼成した土窯 — だるま窯 —

■2本の煙突から吹き出す黒煙

正面から見ると達磨が構えている格好から「だるま窯」と名付けられたようである。だが焚口から見ると、子犬の顔のようにも見える。だるま窯の起源は定かでないが、三州瓦の産地では幕末から明治になって広く普及



豊川市にあった「だるま窯」
(1984. 10筆者撮影)

する。民家に瓦葺きが増え始めたことが背景にあった。

操業では、窯中央部に取り付く二本の短い煙突から、真っ黒な煙を排出する。しかし市街化

とともに、肩身の狭い状況となり、焼成を夜半に行ったとの話も聞く。いまではその姿を見ることもなくなった。

■伝統のいぶし瓦を焼成する「だるま窯」

三州瓦の特徴はいぶし瓦である。産地高浜、碧南地区で瓦産業が栄えたのは、良質の粘土が採れたこともあるが、なんとと言っても出来上がった色合いの「いぶし銀」が人気を博した。その操業法は、約1000枚前後の瓦を窯入れした後、両側の焚口から薪を入れ、火力が安定した頃に石炭に切り替える。当初は薪のみだったが次第に石炭が使われる。そして十数時間から一昼夜近く経った最終盤に松葉や松材を放り込み、直後に窯を密閉。すなわち瓦表面に炭素皮膜を定着させるいぶし工程である。

かつて高浜には300~400基はあっただるま窯。立ち上る黒煙は、三州瓦の産地では当たり前風景、町の風物詩ともなっていた。しかし、効率の良いガス窯やトンネル窯にその座を急速に奪われていった。

■保存された「だるま窯」、復元操業も行われる

三州瓦産地におけるだるま窯の終焉は、昭和の終わり頃であった。黒煙による公害問題がきっかけとなったが、成形から日干し作業を含め多くが人力勝負、しかも経験と勘による夜通しの焼成作業は、息子や若者に継承されることはなかった。

そうした中2基だけではあるが、高浜市と豊田市で市の指定文化財として保存されている。どちらも大正後期の築窯で、築年の古さから全国的にも貴重なもの。豊田市のものは昭和56年、高浜市のものは平成はじめ頃まで稼働した窯である。このうち高浜のだるま窯では、2010年に部分的に窯を補修して、いぶし瓦の焼成に挑戦した。その姿は産地の子供たちはじめ、多くの人の記憶に留めたであろう。

(天野武弘)



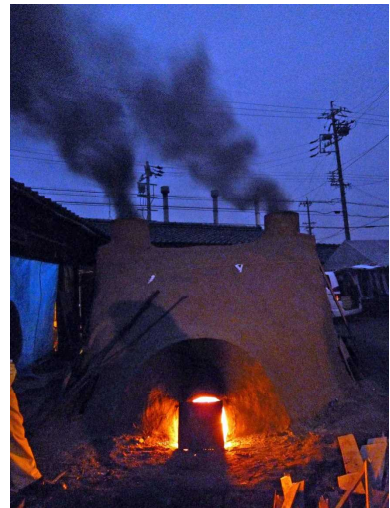
豊田市指定文化財の「だるま窯」 (2009. 7筆者撮影)



焼成中の「だるま窯」(昭和48年)
(高浜市やきもの里かわら美術館蔵)



碧海郡北浜村の「だるま窯」 (『参陽商工便覧』より)



高浜市の市指定文化財「だるま窯」
の復元操業 (2010. 12筆者撮影)